

変形工字文の構造

飯 島 義 雄

は じ め に

縄文時代から弥生時代への移行は、水稻耕作が開始されたことに最大の特徴があり、本地域においてもまさに一大画期であった。該期の遺跡の調査例も増加し、徐々にではあるが、その様相が知られるようになって来た。しかし、未だ系統的な理解を得るには至っていない。その主な理由は弥生時代初頭の発掘調査例が墓域に限られ、居住域や生産域の例がないことによるが、土器研究上において明確な時間軸を設定し得ていないことにもよる。本稿で問題にしようとする変形工字文は、東北地方を中心として分布した縄文時代晚期の亀ヶ岡式土器の終末期から弥生時代の初頭にかけて、土器に施文された主要な文様である。この文様は東北地方に限らず、量的には減少するものの関東地方から中部地方において、主として弥生時代初頭に出土する土器に施文されることが認められ、それぞれの地域における時代性・地域性を考える上で重要な指標となっている。

群馬県域においても、弥生時代初頭の土器である岩櫃山式土器の中に、この変形工字文に属する文様が施文され、同式土器が東北地方との関係を示す要素となっている。最近では、群馬県藤岡市沖II遺跡で比較的まとまった資料が出土し、本地域における弥生時代初頭の地域性を考える上で重要である。

一方、青森県弘前市砂沢遺跡においては、これまで「弥生時代の影響」が指摘されていた亀ヶ岡式土器の系譜に連なる砂沢式土器（芹沢 1960）を伴って、水田遺構が検出された。また、この砂沢式土器には西日本の弥生時代前期の土器である遠賀川式土器が伴うことも確認され、砂沢式土器は弥生時代初頭の土器とされたのである（弘前市教育委員会 1988・1991）。

本稿では、群馬県域における縄文時代終末から弥生時代初頭における地域性を論じる前提として、最近のまとまった資料である上記の砂沢遺跡と沖II遺跡から出土した土器に施文された文様である変形工字文を取り上げ、特に文様の構造を把握することに焦点をあて、将来の種々の検討に備えようとするものである。

1 分析の方法

変形工字文についてこれまでの分析を振り返ってみると、亀ヶ岡式土器の体系化をなした山内清男により、亀ヶ岡式土器の後半から終末期の土器に施文された文様である工字文に対し、「甚だしく並行線化した一種の文様」（山内 1930）と定義されて以来、沈線文の変移の中で考えられて来た。

芹沢長介は、亀ヶ岡式土器の第V期（大洞A'期・砂沢期）の特徴として、「第IV期の工字文がやや流動的になる。間隔をおいた二本ずつの平行線の一端から斜線が流出して互いに結びあう。平行線の一部には二つずつの粘土粒がはりつけられ、口辺には波状の起伏が見られる」とし、変形工字文における斜線に注目した（芹沢 1960）。

また、須藤隆は、東北地方の縄文時代終末から弥生時代にかけての広義の変形工字文を施文工程と文様構成から4類に分け、縄文時代終末から弥生時代初頭の変形工字文については「A型」とした。その文様施文の基本的な工程は、①土器の体部上半に2、3条の平行沈線の施文、②平行沈線間に文様の基軸を構成する反転する斜線の施文、③平行沈線と反転する斜線との交点、交点と交点の中点での彫り込み、④彫り込みの両端に粘土粒の貼付、⑤箆磨き、である。そして、この「A型」は、交点の彫り込みや粘土粒の貼付の有無、重層化、斜線の多条化などにより、4類型に細分化された。また、東北地方南部から関東地方北部の「上下に流水文のように連なる構成をとるもの、波状文的な構図をとるものなど変化に富む変形工字文を「D型」とした（須藤 1976）。

さらに、石川日出志は、東北地方南部から関東地方にかけての変形工字文を念頭において、その施文作業単位として、①文様体の上下を区画する沈線の施文、②前記区画内に単位文様である主文線の施文、③前記の沈線と主文線に副文線を添えて施文、④主文線の反転部・水平部分の中点に短沈線・抉り・押圧・刺突などの施文、⑤縄文の施文、⑥沈文部のなぞりや磨き、無文部の磨き、とした。そして、「変形工字文の種別」は、②の「主文線施文に最もよく規制されている」とし、「主文線の構図を基準」として、主文線が反転を繰り返して横流水形を描く例（A群）、主文線が二カ所の反転部をもち閉塞する例（B群）、主文線が上方に開口する弧線の反復する例（C群）、主文線が閉塞せず、水平方向に展開するが、反転部をもたないため、波形・鋸歯形を呈する例（D群）としたのである（石川 1985）。

さて、筆者はこれまで東北地方北部から北海道南部を中心として分布する亀ヶ岡式土器で、その中葉から後葉にかけての土器群である聖山式土器（日ノ浜式土器）に施文された文様の分析を行って来た。その際の文様の構造の把握の仕方は以下の方法で行った。①文様の全体を把握する。

平坦な面に凹部（陰刻部）を作り出して描出されることから、文様は凹部に規定される。③文様要素・単位文様を把握し、単位文様の配置を明らかにして文様の構造とする。④個々の文様の構造を理解した上で、取り敢えず遺跡内での一般化を図りそれぞれの間の異同を検討することであった（飯島 1981・1989）。その結果、聖山式土器の後半期の土器群とした聖山II式土器の典型的な体部文様である横位連続工字文が、三方向に突出部を持つ三ツ又文を文様要素とし、三ツ又文の多様な組み合わせの内、工字形に凹部を作り出した三ツ又文系文を単位文様として、横位に連続してたがいちがいに配置されることによるものと理解した。

その文様把握の主眼は、文様が平坦な土器面に沈線により凹部を作り出して形成される方法が採られていることから、文様の規則性は凹部に規定されるということであった。変形工字文の分

析を行う場合も、文様の施文方法が同様なことから、同じ方法を取ることが有効と考えられる。また、須藤・石川が指摘するように、最終工程に磨きを主体とした器面調整が行われ、工程の復元には困難性がある。そのため、出来る限り文様の全体像を把握し、文様要素・単位文様、そして文様の構成の有り方から文様の構造を理解することとしたい。

そして、次項で見るよう、芹沢が注目し、須藤が文様の基軸とした「反転する斜線」、そして石川が文様を規制するとした「主文線」の背景には、聖山式土器で見た「三ツ又文」が存在すると理解したのである。次項でその具体像を見てみよう。

2 砂沢遺跡と沖II遺跡出土土器における変形工字文

まず、砂沢遺跡出土の土器に施文された変形工字文を取り上げよう（図1～9）。

図1は文様要素がそれぞれ独立しており、最も基本的な構造を見せていている。体部上半部の文様体の上下を画する独立した横位の沈線が1条巡る（2）。上部突出三ツ又文と下部突出三ツ又文の文様要素が背中合わせの状態で接合せずに近接して単位文様を形成し、横位に均等に4単位が配され（3）、文様構成上「主体文様」で「区画文様」の位置を占める。そして、上端の沈線と背中合わせの三ツ又の間に上部突出三ツ又文が充填される（4）。さらに上部と下部に横位の沈線が充填される（5）。区画文の単位文様の内の上部突出三ツ又文の両端はやや下降し、「副文様」で「充填文様」の下部の沈線の外部の端部は上方に傾き、両者は収斂する傾向を示す。その結果凸部は全体的に三角形を基調とするようになる。ただし、この例の場合充填文様の上部突出三ツ又文の端部と上部の沈線が接続し、文様構成上的一部に乱れがある（4）。

図2では、全体的な文様構成は図1と同じであるが、区画文様である背中合わせの三ツ又文系文の内、下部の三ツ又文の両端が上部の三ツ又文を包み込むように斜め上方に伸びる（3）。また、図1では下部の充填文様の横位の沈線は区画文様の各単位ごとに独立していたが、本例では、隣り合うもの同士が接合した状態を示す（5）。また、体部下部には縄文が施文されている。

ところで、上記2例には、2個一対の貼り瘤は貼付されておらず、貼り瘤そのものと貼り瘤の間の抉りは必ずしも不可分なことを示していない。このことと、変形工字文の祖形と考えられる工字文には貼り瘤の貼付は基本的に関連していないことを考慮すると、当該例は変形工字文の初源的様相を示しているものと考えたい。

図3・4では3単位であるが基本的な文様構成は図1・2と同様である。ただし、区画文様である背中合わせの三ツ又文系文の内、上部の三ツ又文の両端が下部の充填文様の沈線と接合している。また、2個一対の貼り瘤が、三ツ又文の突出部の両脇に貼付される。以上の文様に共通することは、①文様体の上下を横位の沈線で画す。②その沈線内に背中合わせの三ツ又文系文を区画文様として3～4単位配する。③主文様の間を上部突出三ツ又文と横位沈線で充填する、となる。そして、それぞれの例では、区画文様の端部の有り方、充填文様との接合の仕方、2個一対の貼り瘤の有無などに個性がある。

図5の体部文様と図6の口頸部上端の文様の例は、背中合わせの三ツ又文系文をたがいちがいに6単位配したように見えるが、図1～4の変異の中で考えることが許されるならば、背中合わせの三ツ又文系文が3単位配され、その上部の三ツ又文の斜めに下降した両端部が互いに融合し、その間が上部突出三ツ又文と横位の沈線文で充填されていると把握される。なお、図8の体部文様と図9の台部の文様は変形工字文と密接な関係がありながらも変異が大きいことから本稿での検討は割愛する。

図7～9は図1～4で見た上下を画する沈線内の文様構成が2段に構成された例である。図7では、上下段の単位文様が同一位置にある。また細部では、下部の背中合わせの三ツ又文の上部の三ツ又文や充填文様の三ツ又文の突出部が省略されたり（3・5）、区画文様である背中合わせの三ツ又文の上部の三ツ又文の両端が隣同士で接合したり（3）する。一方、図8・9では上下段の単位文様が横に半单位ずれる例である。図8の例では上段の主文様である背中合わせの三ツ又文系文の上部の両端が下段の区画文様である背中合わせの三ツ又文系文の上部の三ツ又文の頂部と接合する（3）。また、下段の充填文様である三ツ又文の頂部は上段の主文様である背中合わせの三ツ又文系文の下部の三ツ又文の頂部と接合している。図9の例では、下段の主文様の背中合わせの三ツ又文系文の上部の三ツ又文の突出部と上部の充填文様である下部突出三ツ又文の突出部と接合する（3）。また、下段には本来三ツ又文が充填される位置に横位の沈線文が充填される（5）。さらに、上段の上下の充填文様である横位の沈線文が斜位の沈線によりS字、Z字状に接続する（5）。そして、2個一対の張り瘤は三ツ又文の上下の頂部の両脇に配される。

上記の2段に構成される文様構成は基本的に1段の構成と単位文様の配置が上下で同一の位置にあるものと、半单位横にずれる例の2種類が確かめられる。文様要素は基本的に1段の場合と同じであるが、それぞれの要素の部分的な変化とそれぞれの要素の接合の仕方によりさまざまな変位が現れる。

このように、砂沢遺跡出土の土器における変形工字文の変異は大きいものの、単位文様・文様要素そして文様構成の面でも共通する要素が多く、極めて齊一性の強い文様である。

次に、沖II遺跡出土の土器に施文された変形工字文を見てみよう（図9～14）。

図10は欠損部が多く不確定要素を多く残すが、大別して上下2段の文様構成であること、それぞれ突出部を相対した三ツ又文を単位とし、たがいちがいに配し（4）、間に横位の沈線文を充填している（5）。上下段の構成に共有される三ツ又文同士が下降しながら融合しているため、上下段とも三角形状の凸部が表される。また、文様体の上下端には、独立した横位の沈線は存在しない。

図11～13は単位数は異なるものの、基本的な文様構成は同一である。文様構成は3段で、上段は突出部を相対した三ツ又文がたがいちがい配され（3）、中段と下段は相対した三ツ又文が並列して配され、内部に横位の沈線が充填される（5）。

図14は上部に独立した横位の沈線を欠くものの、基本的な文様の構造は砂沢遺跡の図5・6の

例と同一である。

3 ま と め

上記で見たように、砂沢遺跡と沖II遺跡における齊一性が確かめられるとともに、地域を越えた同一性があり、系統性と時代性の反映として捉える根拠が存在することが確かめられたと言える。

すなわち、砂沢遺跡と沖II遺跡における変形工字文は文様要素として三ツ又文を有することに大きな特徴の共通性があり、主文様である三ツ又文の両端を土器の表面上で傾斜させることにより、最終的に三角形状の凸面が残され、文様効果として類似の印象を与えることになるのである。ただし、文様体の上下の独立した横位の沈線の有無や単位文様の違い、そして主要文様同士や主要文様と充填文様の接合の仕方によりそれぞれの個性があるのである。

つまり、両遺跡における変形工字文は同質性は持しながらも異質性があり、文様のみでは同時性を積極的に論ずる訳にはいかない。砂沢遺跡の報告書においては、変形工字文は10類型27種類に分類されている。一方、沖II遺跡においては、本稿で取り上げた例以外にも変形工字文の類例も存在し、類型化される可能性が高い。しかし、小破片のため全体像が把握できなかったり、例数が限られているため、一般化できない等の制約がある。今後、それぞれの遺跡における各類型の施文された土器の出土状況を検討し、時期の細分化の検討がなされなければならない。さらに、東日本全体の中での変形工字文の変位の中で、その系統性が論じられなければならないのである。

本県域の弥生時代初頭の土器群の研究にあたっては、東海地方の条痕文土器との関係に力点が置かれて来たと感が強い。しかし、縄文時代晩期の各期に、とりわけその終末期の千網式期には東北地方の要素が流入していることを忘れてはならない。本地域の弥生時代初頭の土器群の全体像を把握するためには東海地方の要素と同時に、東北地方との関連も検討しなければならないのである。

ところで、砂沢遺跡出土の土器に施文された変形工字文における主要な文様要素は三ツ又文であり、単位文様は上部突出の三ツ又文と下部突出の三ツ又文が背中合わせに配置されたものであった。この理解が正しければ、亀ヶ岡式土器における中葉から後葉にかけての聖山II式土器における横位連続工字文と弥生時代初頭の砂沢式土器における変形工字文は同一の文様の系譜上にあると言える。今後、工字文の全体像の把握の中で具体的に検証して行かなければならない。その際、聖山式土器の中には、「C字状の凹部と三ツ又文を上下に入組ませた三ツ又文系文が、交互にかつ横位に配列されている。C字状の凹部の中央では上下双方に三ツ又文系文が配されるのを基本」とするC類とする文様類型が存在する（飯島 1989）ことも注意しなければならない。

また、東北地方における縄文時代後期末から晩期初頭にかけての三叉文（小井川 1980）と三ツ又文との関係については、おそらく密接な系統関係の存在が推定されるものの、その詳細について未だ把握するに至らないため、この問題も将来の課題としたい。

さらに、岩櫃山式土器の中の、特に甕形土器に主として施文される三角連繫文については、変

形工字文からの変遷を推定したが（飯島 1988）、その再検討は機会を改めたい。

以上、本稿では変形工字文の構造の理解に主眼を置いて論じて来た。今後の東日本全体を視野にいれた系統性と時期区分の基礎作業の一つとしたい。

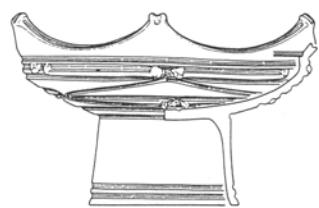
本稿を執筆するにあたっては、資料の実見に際し、弘前市教育委員会、藤岡市教育委員会、成田正彦氏、伊藤実（旧姓・荒巻）氏に格別なご高配を戴いた。心から感謝申し上げる。

なお、本稿は「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団平成元年度職員自主研究活動」の助成金を受けて実施した研究成果の一部である。

引用・参考文献（年代順）

- 山内清男 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」 『考古学』第1巻第3号 pp.139～157 1930
芹沢長介 『石器時代の日本』 1960
芹沢長介編 『峠下聖山遺跡』 1979
小井川和夫 「宮戸島台開貝塚出土の縄文後期末・晚期初頭の土器」 『宮城史学』第7号 pp.9～21 1980
飯島義雄 「仮称「連繫入組文」と「横位連続工字文」について」 『考古風土記』第6号 pp.1～17 1981
須藤 隆 「東北地方の初期弥生土器」 『考古学雑誌』第68巻第3号 pp.1～53 1983
石川日出志 「関東地方初期弥生式土器の一系譜」 『論集 日本原史』 pp.479～506 1985
荒巻 実他 「C11 沖II遺跡」 1986
須藤 隆 「東日本における弥生文化の受容」 『考古学雑誌』第73巻第1号 pp.1～42 1987
弘前市教育委員会 『砂沢遺跡 発掘調査報告書一図版編一』 1988
飯島義雄 「所謂「三角連繫文」の構造とその系譜」 『群馬の考古学』 pp.189～198 1988
飯島義雄 「体部文様からみた「聖山式土器」」 『考古学論叢II』 pp.177～210 1989
弘前市教育委員会 『砂沢遺跡 発掘調査報告書一本文編一』 1991
須藤 隆 「弥生社会の成立と展開」 『新版「古代の日本」』第九巻 東北・北海道 pp.75～104 1992

図1～14の立面図と図10の俯瞰図はそれぞれの報告書からの転載である。ただし図10については加筆した。



0 20cm

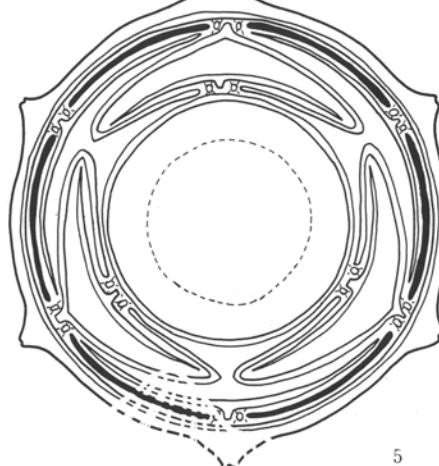
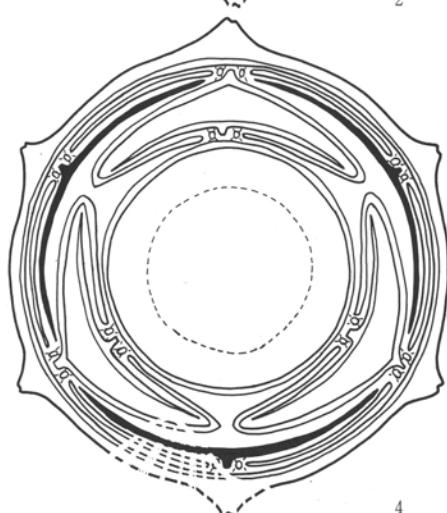
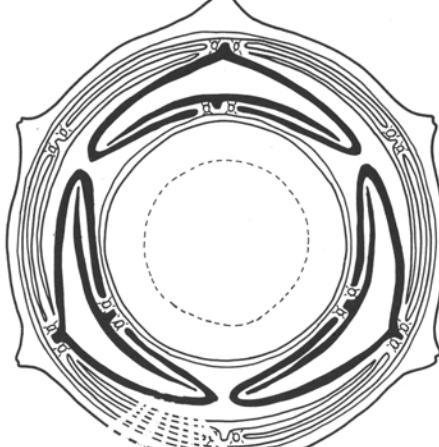
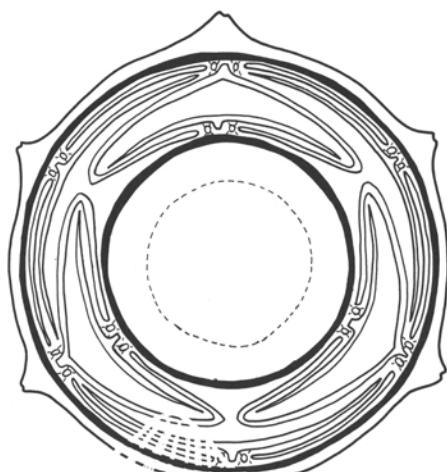
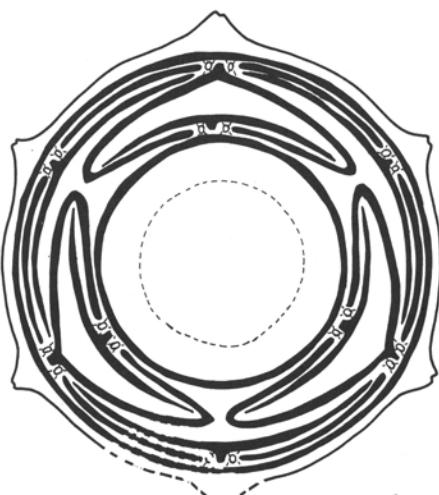
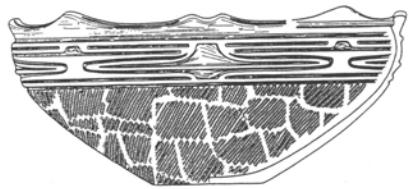


図1 砂沢遺跡出土土器 (1)



0 20cm

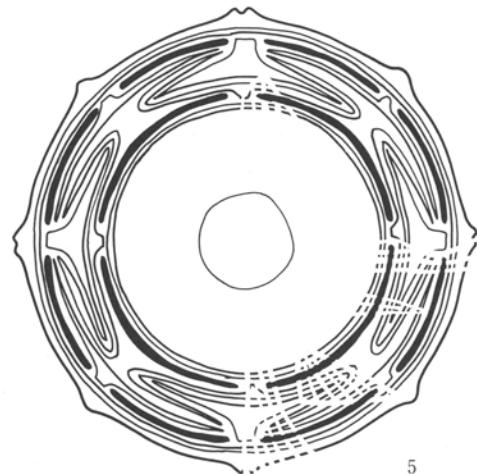
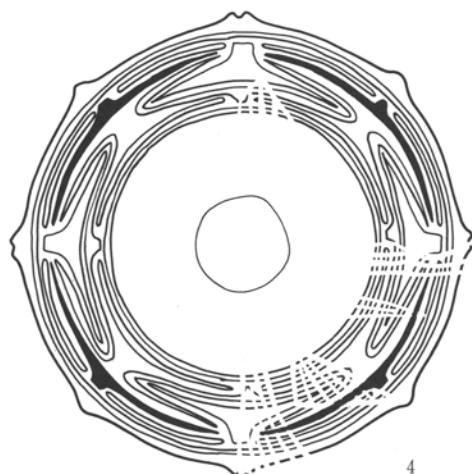
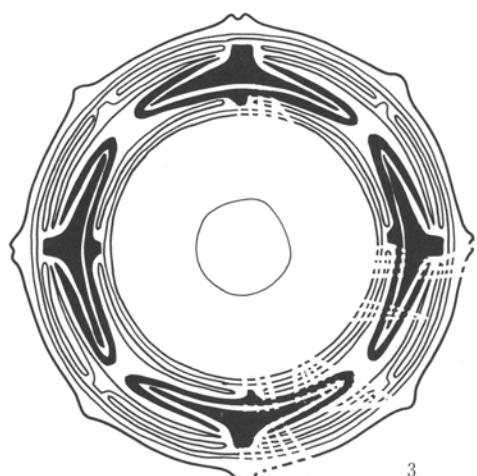
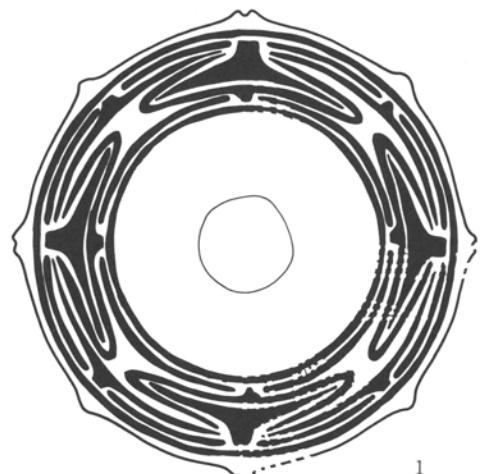


図2 砂沢遺跡出土土器 (2)

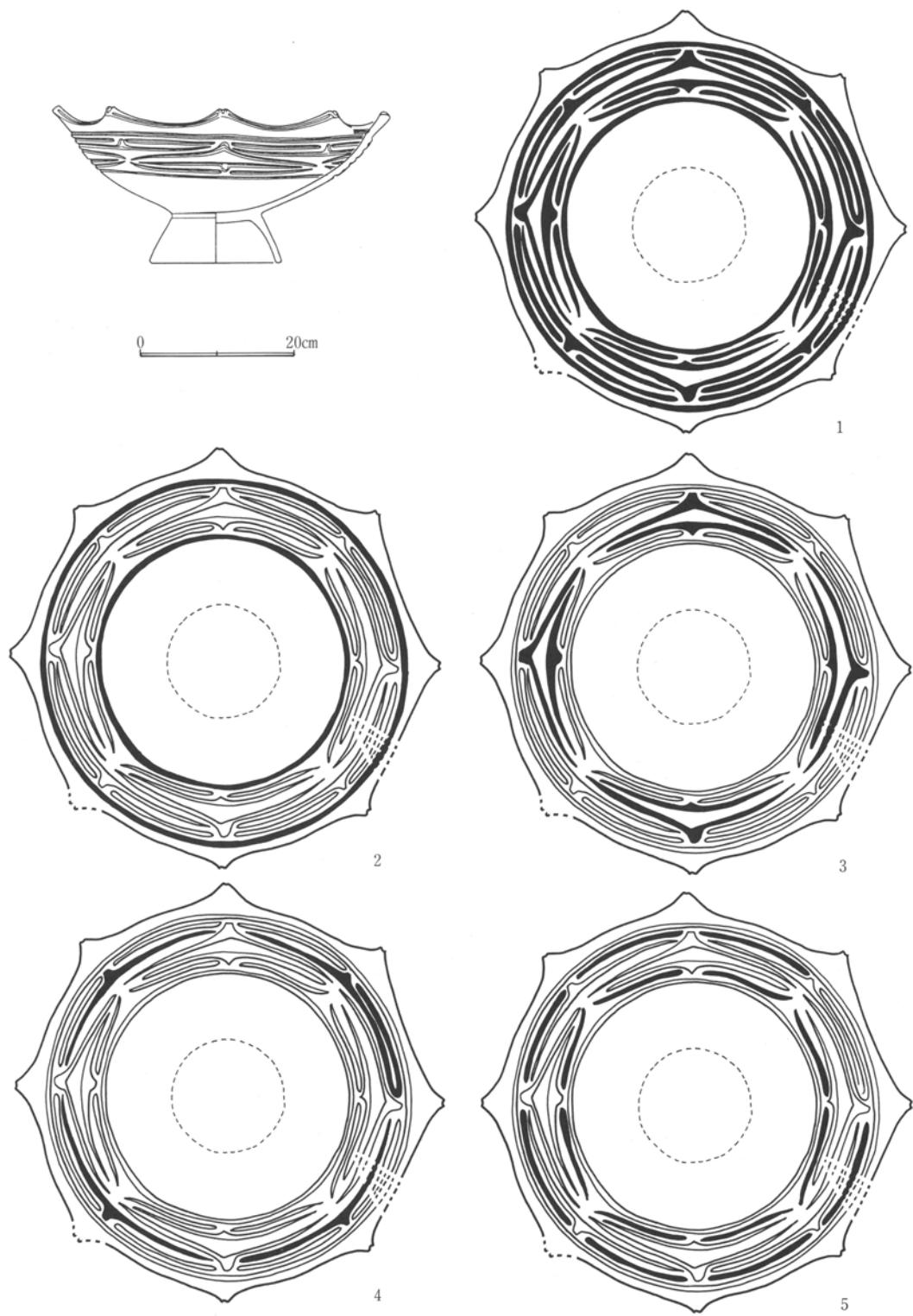


図3 砂沢遺跡出土土器（3）

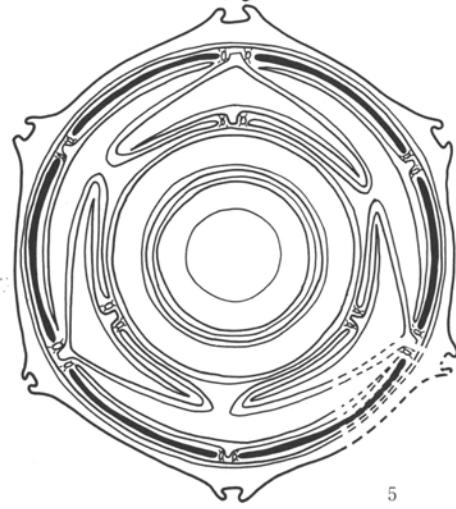
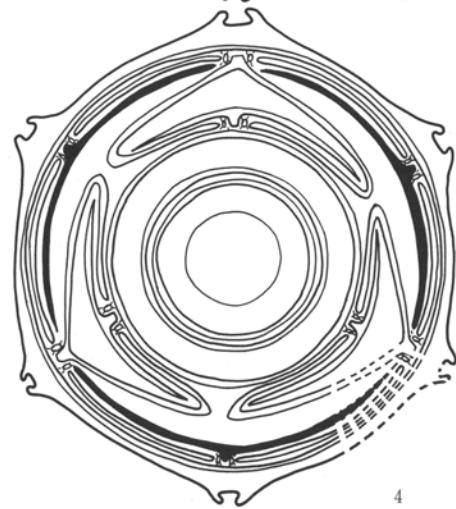
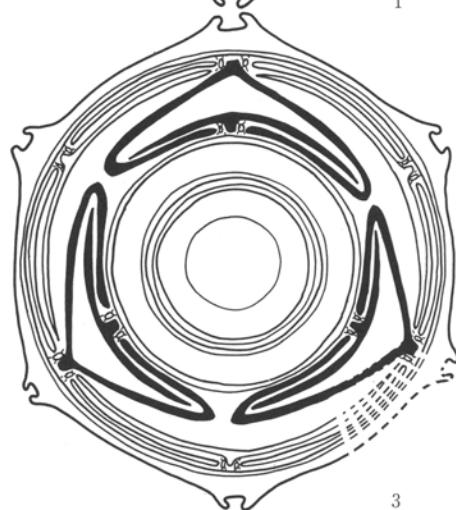
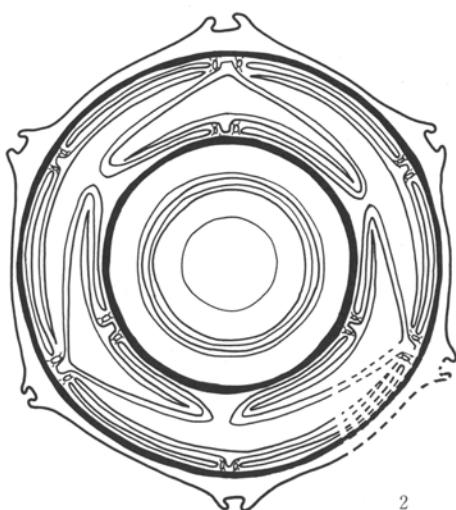
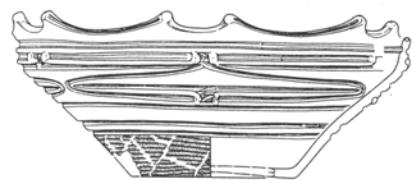


図4 砂沢遺跡出土土器 (4)

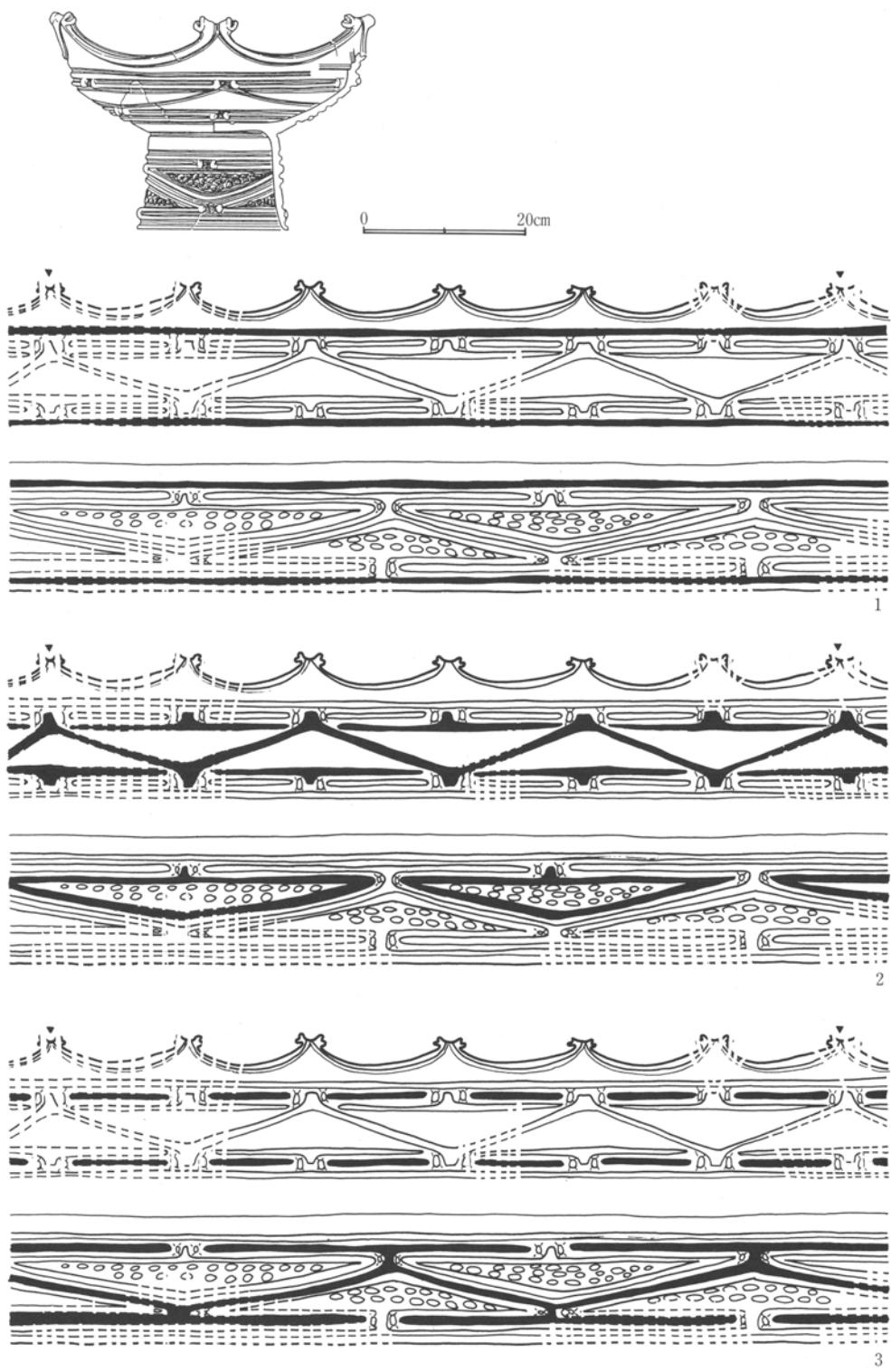


図5 砂沢遺跡出土土器（5）

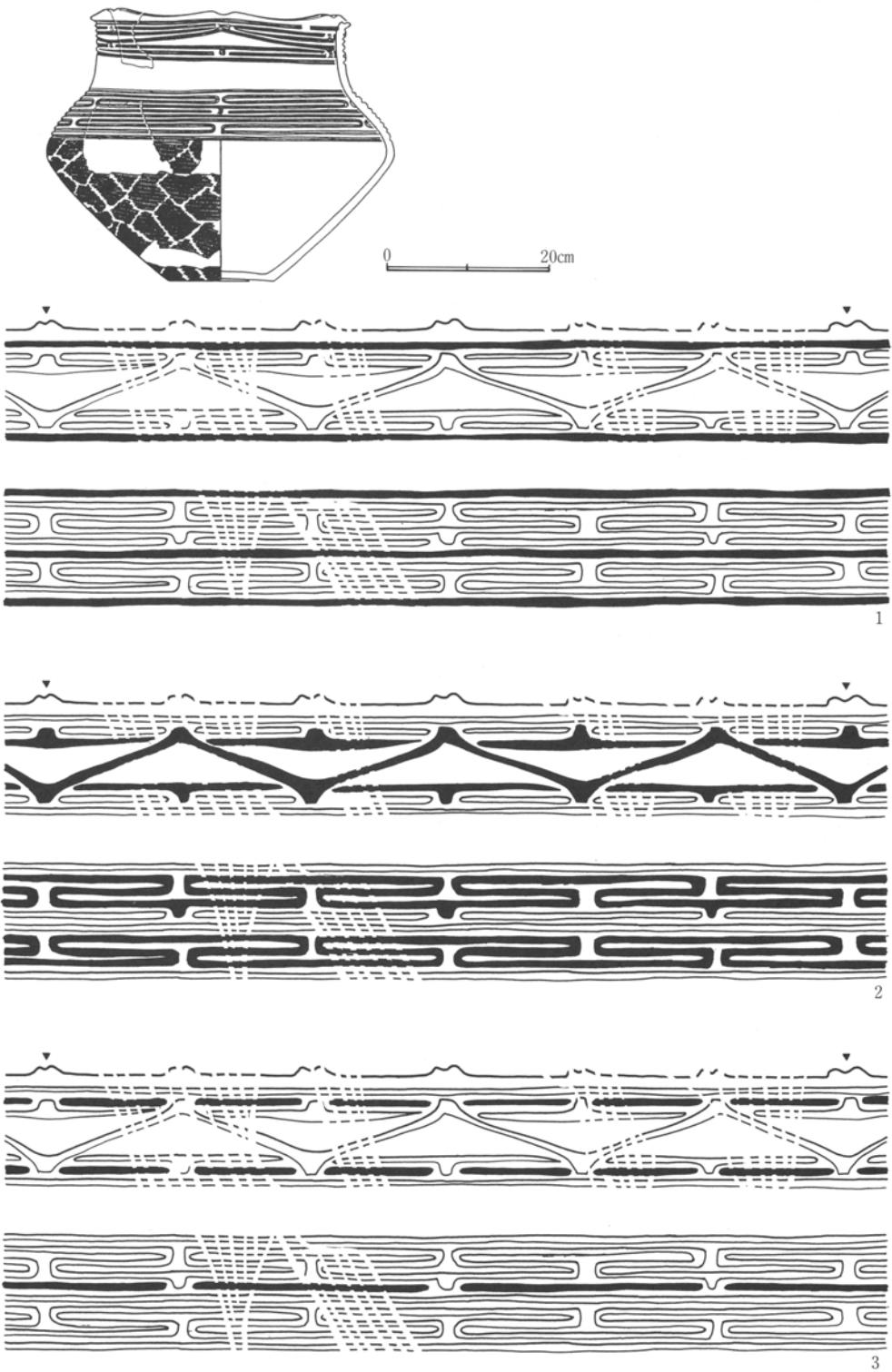
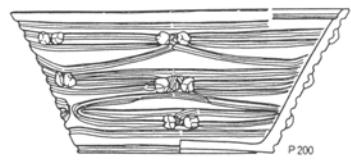


図6 砂沢遺跡出土土器の体部文様（6）



0 20cm

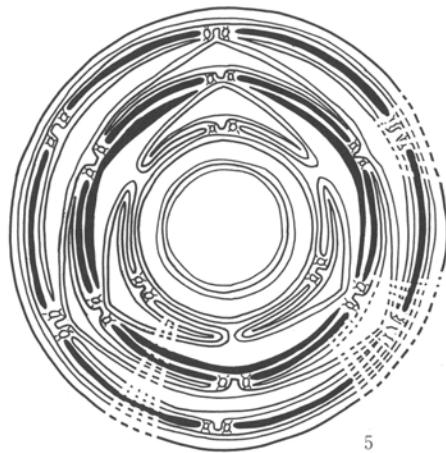
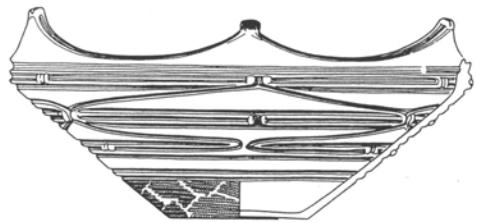


図7 砂沢遺跡出土土器 (7)



0 20cm

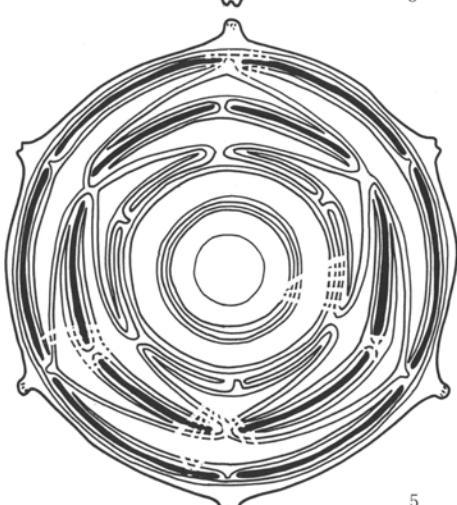
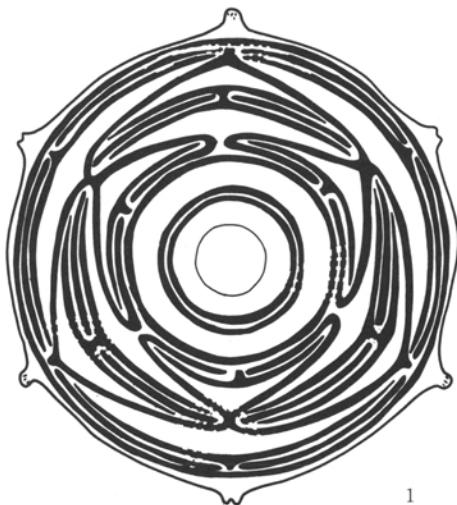
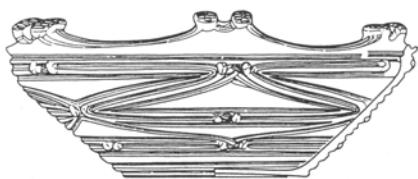
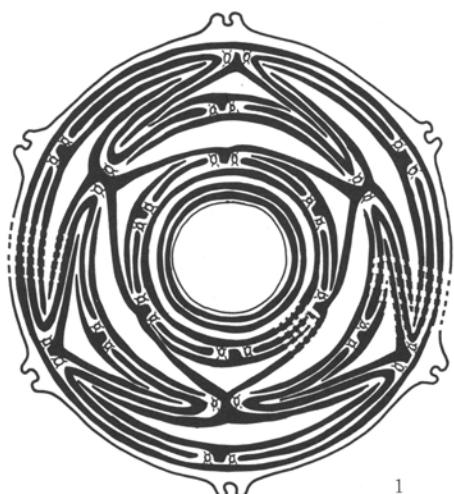


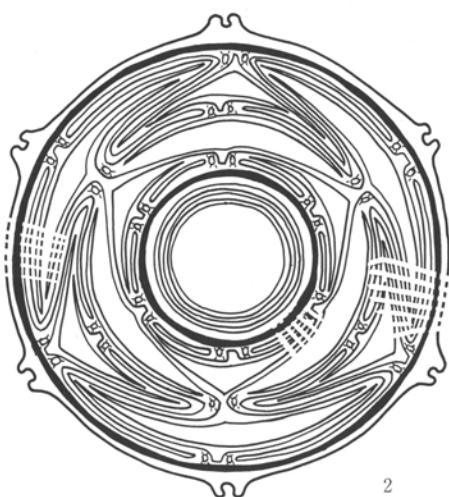
図8 砂沢遺跡出土土器 (8)



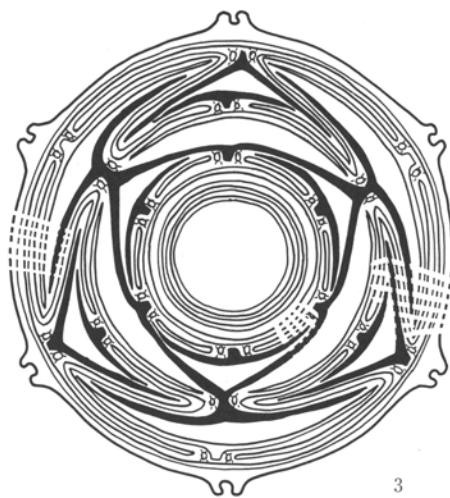
0 20cm



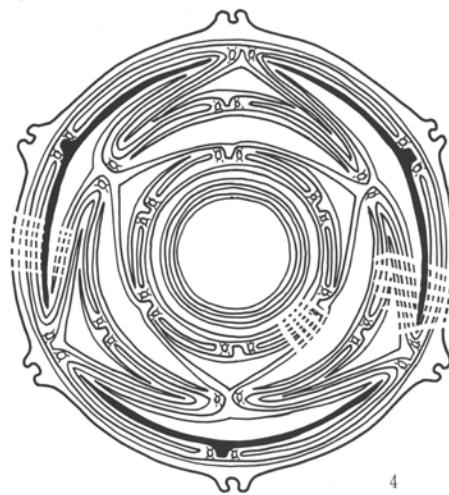
1



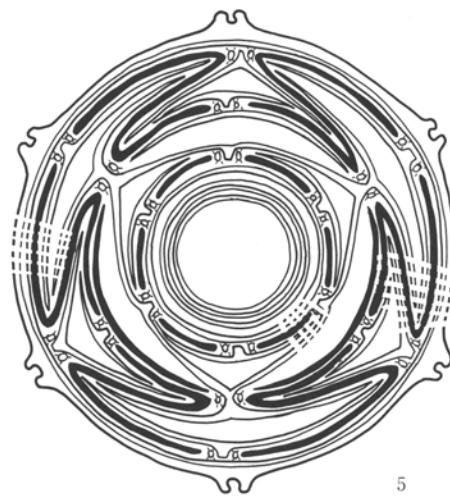
2



3



4



5

図9 砂沢遺跡出土土器 (9)

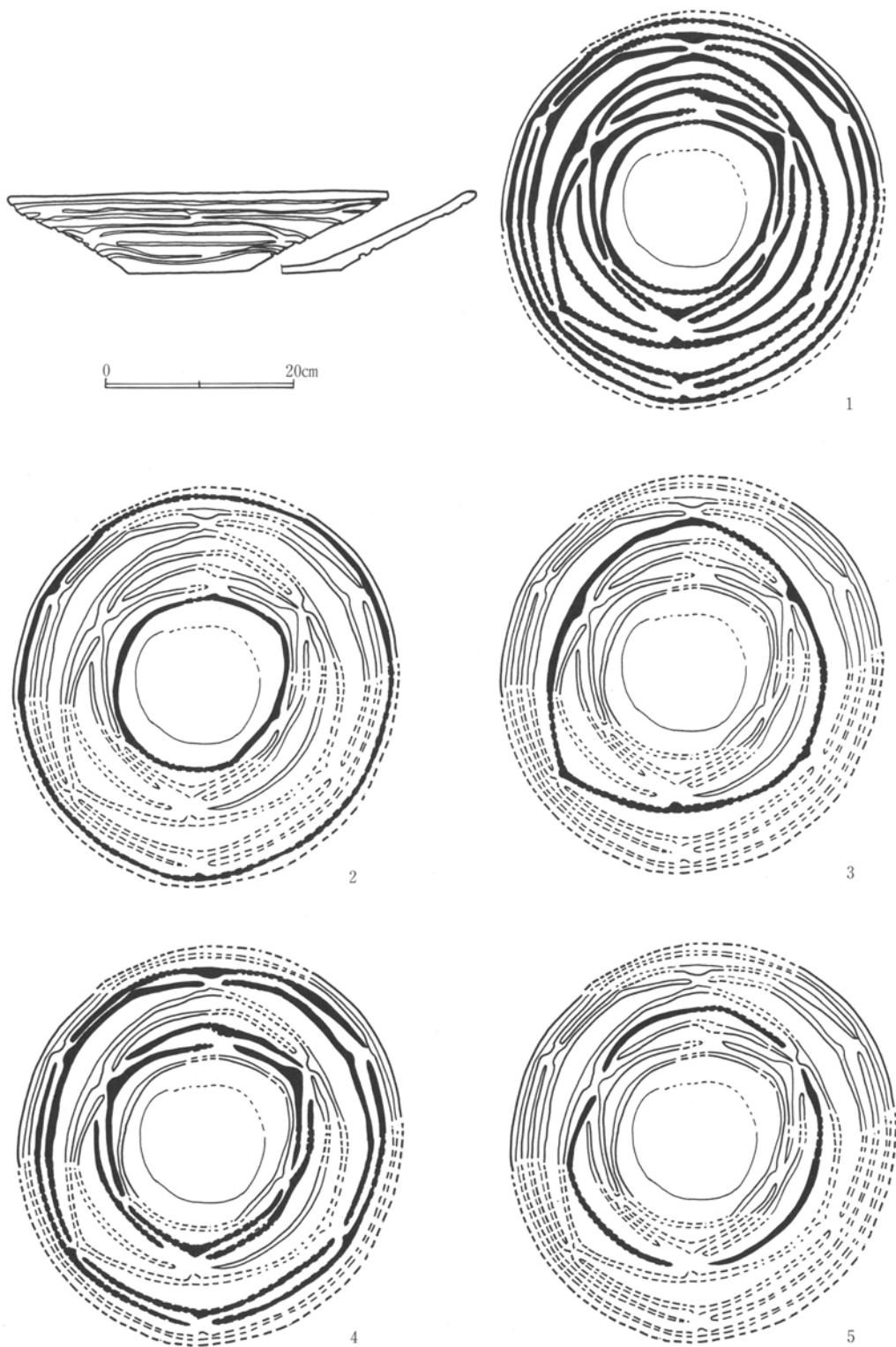
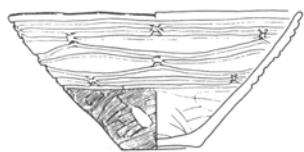


図10 沖II遺跡出土土器（1）



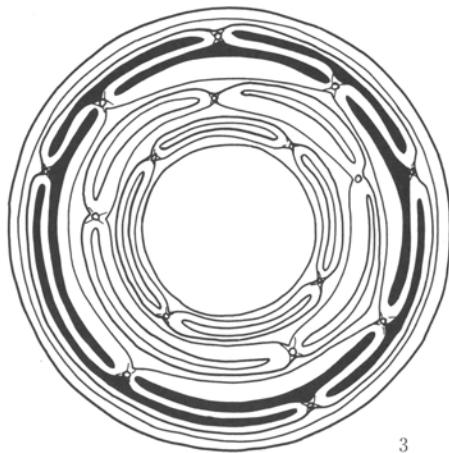
0 20cm



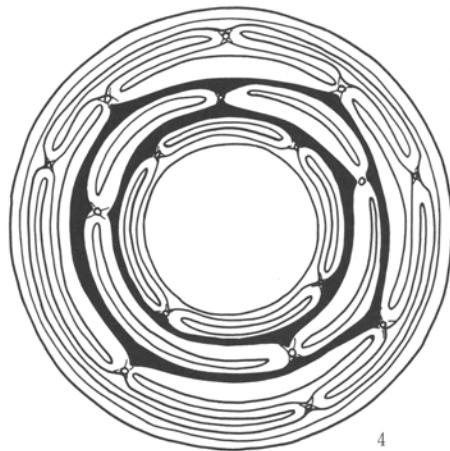
1



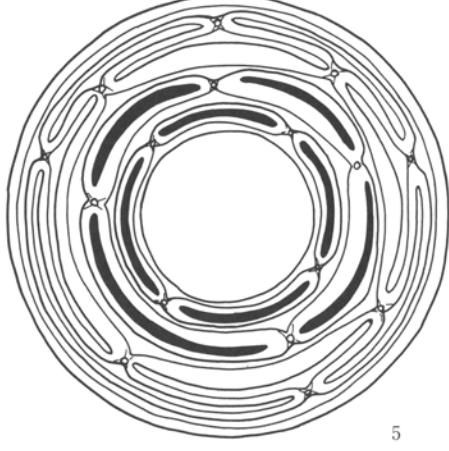
2



3



4



5

図11 沖II遺跡出土土器 (2)

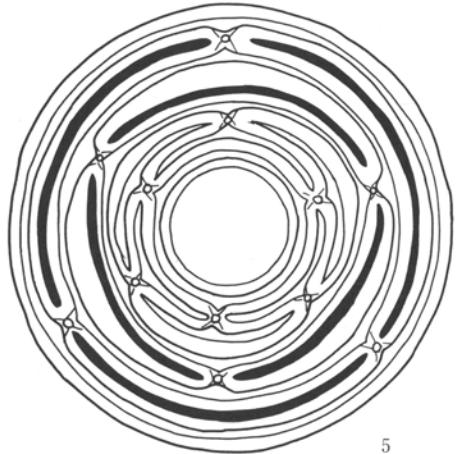
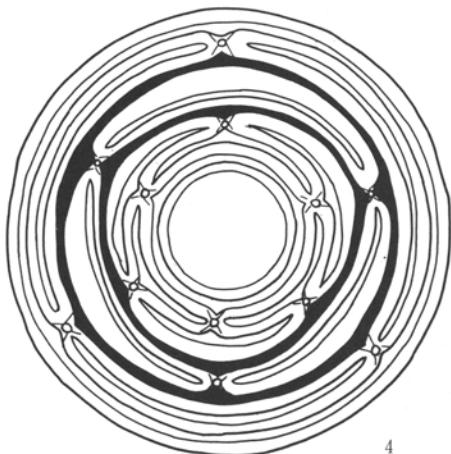
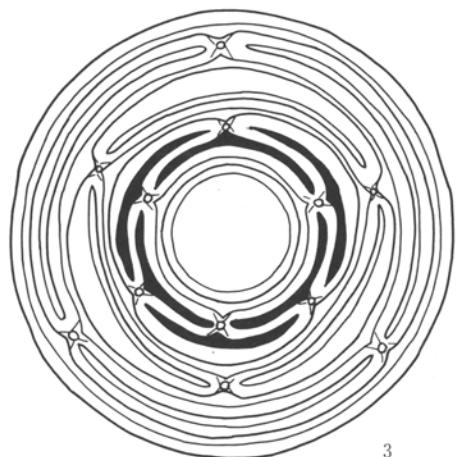
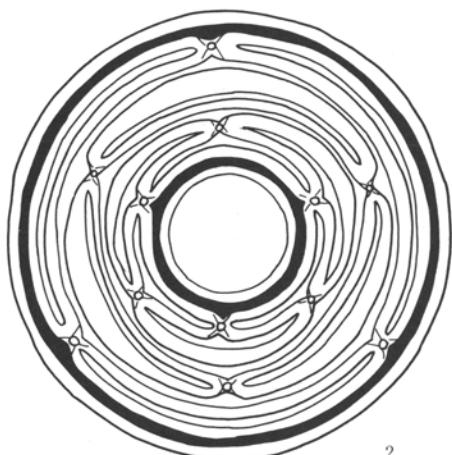
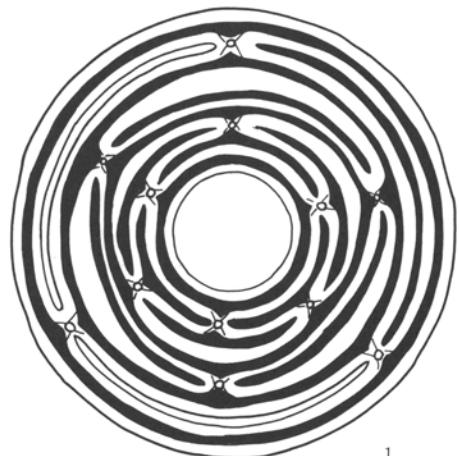
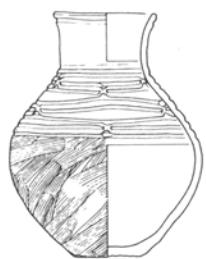


図12 沖II遺跡出土土器 (3)

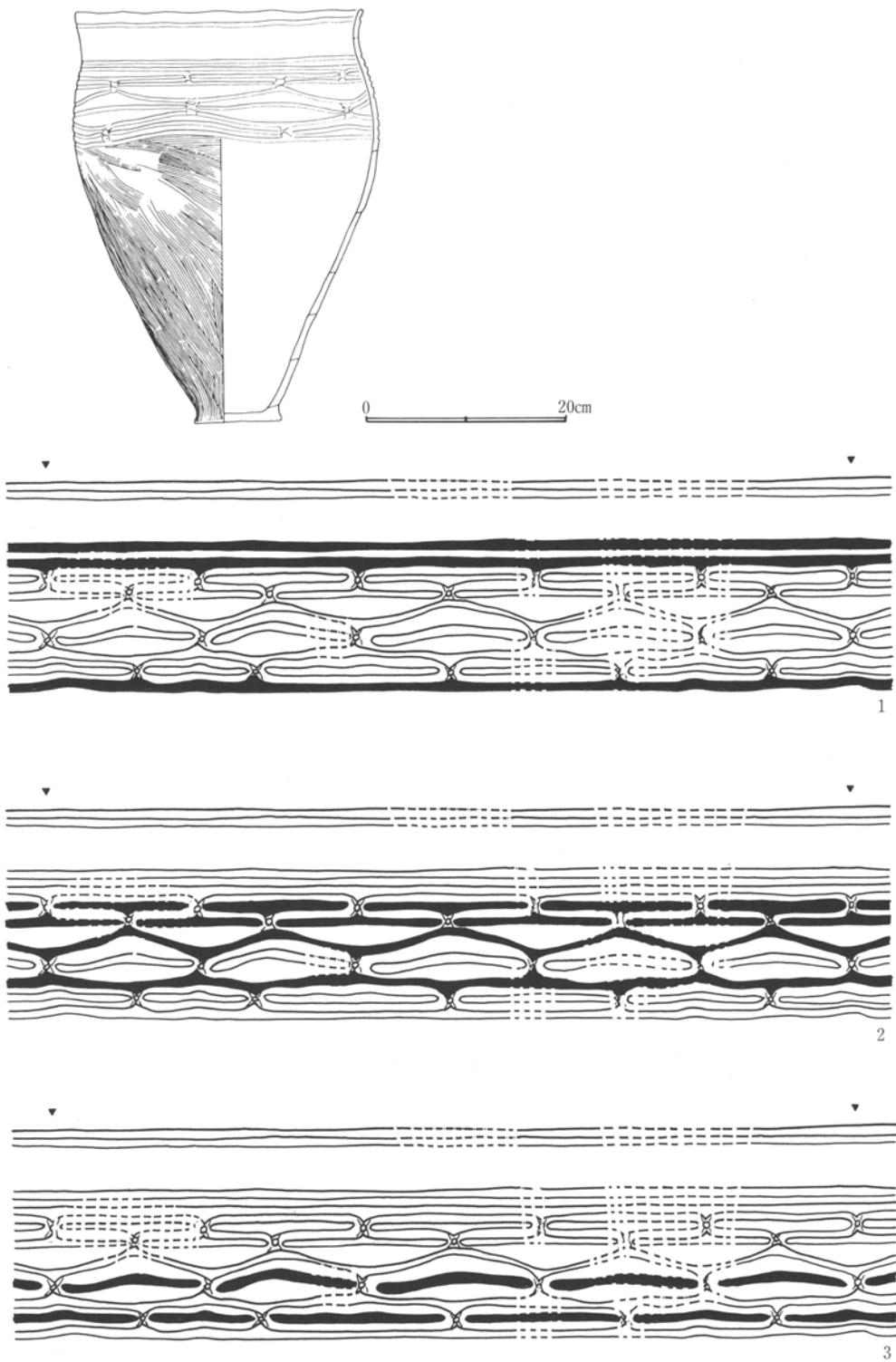


図13 沖II遺跡出土土器 (4)



0 20cm

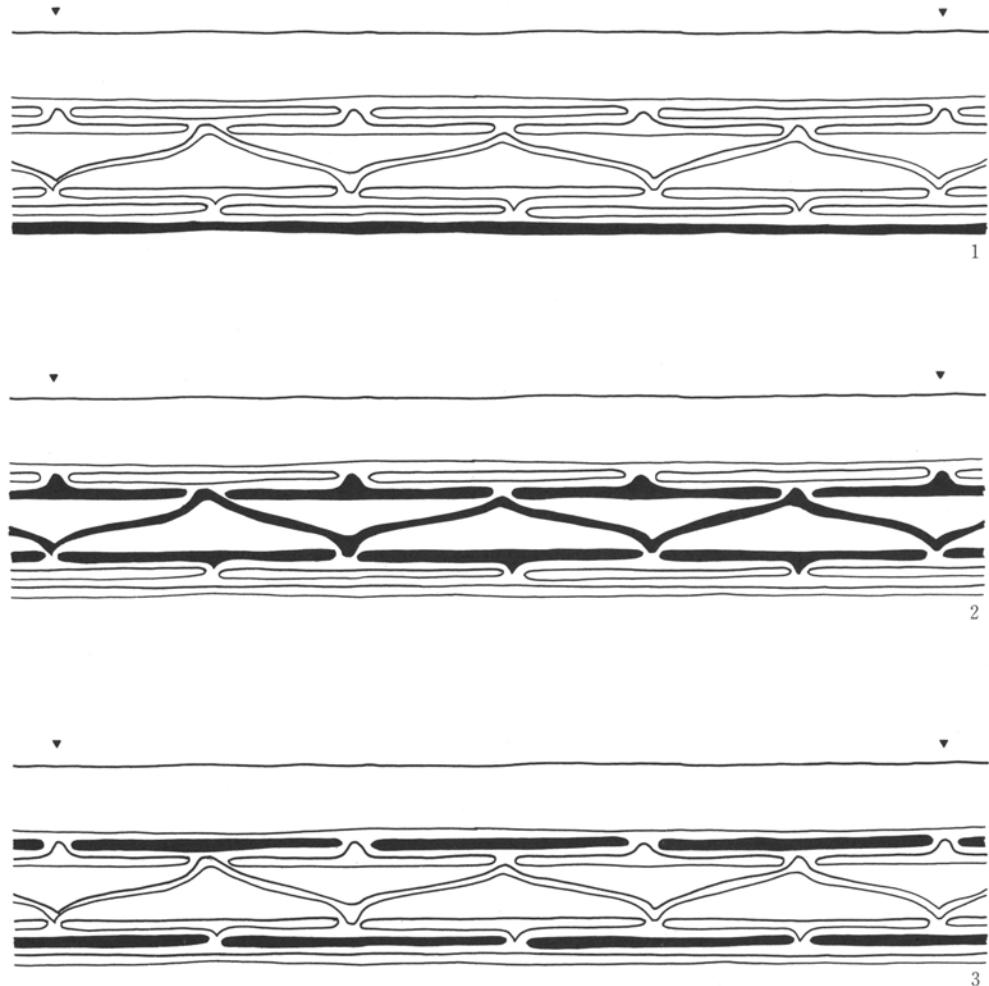


図14 沖II遺跡出土土器 (5)